



熊本では初めて開かれた慢性骨髄性白血病の患者・家族会「いずみの会」の交流会。右は田村英人代表＝熊本市中央区

慢性骨髄性白血病
熊本市で初交流会

患者ら40人

全国の慢性骨髄性白血病の患者・家族ら約800人でつくる「いずみの会」(神奈川県、田村英人代表)が13日、

熊本市中央区の市民会館崇城大ホールで交流会を開いた。熊本開催は初めてで、県内外から約40人が参加した。慢性骨髄性白血病は血液細胞のもとになる造血幹細胞が「がん化」する病気で、年間に人

口10万人当たり1〜2人が発症するという。分子標的薬の登場で生存率は飛躍的に向上したものの、薬は高額で飲み続けなければならず、患者の経済的、精神的負担が大きい。

国立病院機構熊本医療センターの日高道弘血液内科部長が発症の仕組みや治療薬の副作用などについて講演。参加者からは、治療薬を休止して経過を確認する臨床試験などについて質問が出た。

参加者は6班に分かれて、孤独な闘病生活や医療費負担などの悩みを語り合った。宮崎市から参加した柴美穂さん(23)は「患者が少ない病気なので、患者会はつながり合える貴重な存在です」と話した。(高本文明)